

[illegible]

月口ケツトがボールが

「五十九号」の「星の生と死」は恒星の生涯をとり扱っていたが、年のはじめにあたり、宇宙全体のはじまりについて現在考えられている事の内容を紹介しようとする。筆者はもとよりこういったテーマについては門外漢ではあるが、金物理学を専門としている関係上、資源量の面から宇宙組成と物質分布には興味を持っている。野次馬の興味の副産物として不備な点は「容赦願いたい」。

遠くはなれた星雲の分光学的研究の結果、遠くで暗い星雲はメプクトル線の位置が長波長側にずれていることが発見された。この事実には違さかいてく物体から出た波の波長は長くなるというドップラー効果で説明され、地球から近い星雲は大きな速度ではなぬれいていっていると考えられた。地球のある銀河系が特別のものではない



ヘリウムと中性子捕獲によって重い原子核ができた。しかし原子量5と6のところで分裂反応の方が早くなるため、炭素や酸素などのより重い原子核はこの反応ではできない。結局、現在の宇宙組成のうちヘリウムは大部分大爆発直後に作られたが、残りの元素は新星爆発で鉄まで、超新星爆発でウランウムまでの重い原子核が作られ、宇宙空間に放出されたと考えられている。太陽系の年齢が約五十億年から百億年とすると、太陽より重くて短命な星は新星爆発をおこしてしまっており、太陽系は燃えかすの重元素の混じった材料からできたことになる。こうしてみると核燃料物質のエネルギーも遠い昔の超新星によって書えられた一種の化石エネルギーに他ならない。

電波天文学の発展が定常宇宙論にどのような影響を及ぼしたか、以上のことをまとめたように、以上の結論もあくまで現段階の観測結果に基づいたものであり、今後月夜などに観測装置が作られるようになるれば、また必ず修正されるだろう。

(工学部助教)

漫才をめざして上方演藝界を臨望せよと出立来ない。それ程に漫才がおもしろいという話は大分。戦後三十年の間、上方演藝界の主流は何といっても漫才であった。活版を早する漫才がなかったとしたら、大阪の演藝界、今日の姿は見られなかったと言ってもよいだろう。戦後、いち早く復興した漫才が、そして漫才師がラジオにテレビに活躍し、大阪の演藝界を活性化し、ひいては大阪文化に灯をともし、多くの笑いを供給し続けて

井上宏

「上方漫才」といふものは、江戸時代から明治時代にかけて、上方（京都・大阪）で盛んに行われていた漫才の一種である。この漫才は、主に二人で演じられ、一人は「ツッコミ」（ツッコミ手）と呼ばれる役で、もう一人は「ボケ」（ボケ手）と呼ばれる役で、ツッコミ手がボケ手の言動や行動に対して、鋭いツッコミを入れる。この漫才は、明治時代中期頃から大衆化し、全国的に流行した。戦後には、テレビで放送されるようになった。この漫才は、現代でも人気がある。この漫才は、主に二人で演じられ、一人は「ツッコミ」（ツッコミ手）と呼ばれる役で、もう一人は「ボケ」（ボケ手）と呼ばれる役で、ツッコミ手がボケ手の言動や行動に対して、鋭いツッコミを入れる。この漫才は、明治時代中期頃から大衆化し、全国的に流行した。戦後には、テレビで放送されるようになった。この漫才は、現代でも人気がある。

の個性なりキャラクターと結びついた上に成立するものであり、そのあり方は演者によっても違つし、また時代によつても違つ。今は亡き、平和ラッパは、ボケの二つの典型であつたし、笑ひの一時代を画した人であつた。しかし、今では大型のボケはなくなつて、現代の漫才はボケを喪失してきた漫才と言つことが出来よう。瀋園してボケをあいまいにしてき

転換をスピーディーにやってくれる」というタイプが多くなっている。やすし・喜よしやW・ヤンソンがそうである。言葉は絶えずよみなめ流れるし、笑わせもするうまいとも思ふ。でも、何か大それたというところが出て来ない。

漫才が、太夫と才蔵、ツッコミとボケの組み合わせという独特の構造を持っていることからすれば、ボケ役のチャンピオンは、漫才界のチャンピオンであり、お笑いのスターになる。

現在の漫才が、量的にはかなりいながら質的に問題があると言われるのは、語の内容が単に低俗であるとか、滑稽であるとかということではなくて、新しいボケ役、スターを創造し得ていないことにあると言わなければならない。それはまた同時にまたかなツッコミを創造していかないこともあ

今の多くの漫才師は、ボケ役といふのは、舞台上で挿入的な演技をするものだと思っている。いいが、これはボケ役の墮落としめが言いよがない。そういう状況の中で、またまた救いがあるのは、愚問答だ。

役が立ており、氣持方がよい。

私達の日常の生活は、定型化された言葉や概念、約束事、秩序のもとに営まれており、私達の意識は、秩序の内側で固まってまいり、あるいは眠っている。それを硬化した上から語り出している意識を挑発し、驚かせ、まじけさせようとするのがボケの役割だとも。目にもかきえない方向から、ゆびさすたりおひやかしたりして、現実を相対化してみせるのだとも。ボケは定型化された現象をつまみ分け、ていど代わりた、頭をかたづけられを受け取る。現在、記憶もつまずくのと同時に、コマンドの間の隙れとしてのたたきつけがますます多くなると言われている。

あつこ。

演義場をとく時、私はいつも新人に目を配る。何か新しいボケが見られはしないかと期待をもっているのだが、このところその期待はいつも裏切られ続けている。今年では………と私は決して新なる期待をかけている。

(社会学部助教)

ボチボチ卒業論文の仕上げの時期である。昨年中に大部分の作業を終わってまことにかる人、今から追いつみにかかる人、いろいろあつう。正月気分は紙面を目にするころは、フツ飛んでいるはずである。九十周年の年は過ぎ去つて関西大学は百周年へ向けての十年間に入った。図書館総合計画委員会も発足した。元日や今年もある大晦日である。大学はこれから年度末の行事で忙しくなる。卒業を控えていない学生諸君も後期の試験の準備で忙しいといふであらう。これから試験の終わりで、卒業論文の提出までは一年の内でも最も寒い時期である。健康に注意するのはいづまでもないが、寒さに負けずに昭和五十一年

▼編集後記▼

工学部教授 庄司 光
宮本憲一 共著

（岩波新書・130E）

対的損失の過多性、企業と政府間
治体とのゆ着性を鋭く指摘してい
る。また、公害の影響、公害防止
の科学と技術、環境政策、公害
問題の展望、住民運動の成果と展
望についてユニークな分析をして
いる。学生諸君必読の書として高
く評価されるべきものである。

て、海上保険の基本概念や、各契約の理論的説明が血の通つたものになっている。

この特徴は、また、別の面からも見える。これまでの本はいわば保険利用役の売り手ないし、卒々向きの本であったのに対して、本書は、貿易・海運等での利用者が

ある。第一部のいくつかの論文なかでは、市場のひずみが存在する場合の政策の順位づけの理論、現実への有用性という観点から、くに注目しに値すると思われる。第二部の諸論文は、多国絡企業に表される現代の直接投資を分析したもので、いまだで多国絡企業

研究の先鞭をつけられた。
公害問題研究の最高権威者
と行動され、クリミナルな企
業から環境破壊という本制的

商学部教授 亀井利明著
『海上保険総論』
(成山堂書店・二〇〇〇円)

観点が重視されている。最近問題の海上公害に対する保険制度の廃明などはその適例であって人はどこからでも本誌に入り、これまで

つては企業論的分析が多く、伝統的な国際経済論の枠組を用いた分析したものがほとんど見当ら

あるべき姿としての公害対策政策を提示されてきた。

「亀井先生の講義は面白い」と
ゼミに来ている学生などは口を揃
えていう。これは一寸意外であ
る。なぜなら、弘達寺代とは、

にない興味をもって海上保険を勉強することが出来る。(東海林滋)

経済学部助教授 小田正雄著

『国交貿易』

専門書というと学生諸君にと
ては難解と思われるかもしれな
が、又必ずしもその論察明解で

またのが本書である。

保険の勉強はさっぱり面白くない
というのが、定説だったからであ
る。大抵の本は、ごく観念的な本
質論か、ガチガチの契約論が多

『直接投資』
(新評論／現代経済学叢
書V・一五〇〇円)

かりやすい。経済学の学術論文
すぐれた見本という意味でも参
に値しよう。また、現代の国際
経済学の基本理論をまとめた二

差しとめの必要性を強調し、次いで、日本の公害の特

規 かつたのである。

學術書は専門書と教科書とに分
類されるが、本書は専門書に属す
る。著者が各種の學術雜誌にこ
れまで発表した十一篇の論文を

をもち学生にとっては、必読の書であるといえよう。